

平成 21 年 6 月 3 日現在

研究種目： 若手研究 (B)
 研究期間：2007 ～ 2008
 課題番号：19791764
 研究課題名 (和文) 地域における母乳育児の継続に影響を与える要因の検討
 研究課題名 (英文) A Study of the breastfeeding practices of Japanese mothers.
 研究代表者 松村 寛子 (MATSUMURA HIROKO)
 札幌市立大学・看護学部・助教
 研究者番号：6043314

研究成果の概要：

本研究は地域における母親の母乳育児継続のための支援及び母親の QOL を高めるための支援を検討するために母親の母乳育児の継続に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした。母親の母乳育児の継続に影響を与える要因として母親が母乳育児に日常的メリットを感じる事、看護職などの専門職種者や、親、夫などの身近な人からのサポートが重要であることが示唆された。母乳育児を継続することが母親の育児をする自信につながる事が示唆され母親の母乳育児継続を支援することは育児の QOL を高める可能性が示唆された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,200,000	0	1,200,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,900,000	210,000	2,110,000

研究分野：看護学

科研費の分科・細目：看護学 ・ 地域・老年看護学

キーワード：母乳栄養、育児支援、母子保健、母乳育児、地域看護学

1. 研究開始当初の背景

1989 年に世界保健機構 (WHO) と国連児童基金 (UNICEF) は「母乳による育児を成功させるための 10 カ条」を発表し、小児保健および子どもの幸せにとって母乳が重要であることを世界各国に示した。近年、母乳育児に関する研究が進み、免疫面、栄養面、母子の愛着形成を促すなど様々な面で理想的な栄養であることが明らかにされている。我が国

では核家族化・少子化が進み、母親たちは身近な人々から少ない支援のなかで様々な不安を抱えながらも母乳育児に取り組んでいる現状であり^{1,2)}、母乳育児継続のための地域での支援は未だ十分とは言えない。

ヘルスプロモーションの概念が提唱されてから、健康は、心身の健康にとどまらず生活の質 (QOL) の向上が重要と考えられてきた。我が国の母子保健活動においても、住民

の幸福やQOLの向上を視点に加えた施策が展開され、2000年の「健やか親子21」は保健水準やQOLの向上を目標として21世紀の母子保健のビジョンを示すものとして策定された。そのなかの課題の1つには「子どもの安らかな発達の促進と育児不安の軽減」があげられ、具体的取り組みに「出産1か月時の母乳育児の割合の向上」が目標としてあげられている。このことに表されるように母乳育児を継続のための支援は、地域で生活をする母子のQOL向上のためには不可欠であり、地域で新生児訪問を行う保健師活動においても重要視されるべき課題であると考え。しかし、我が国においては出産後の母乳育児を支援する助産師の取り組みの報告は見られるが^{3,4)}、地域で働く保健師の立場からの報告は少ない⁵⁾。海外では、1989年のWHO・UNICEFの提言後、各国で母乳育児継続のための地域での様々な取り組み^{6,7)}が報告され、地域の保健師による家庭訪問が母乳育児継続に有効であったという報告⁸⁾もみられる。これらのように、母乳育児継続のためには、産科領域のみでなく、地域における支援の継続が重要であると考え。本研究は母乳育児を行う母親の支援のための継続的な取り組みおよび、母親のQOLを高めるための支援のための重要な基盤的調査となる。

- 1) 永山美千子(2002). 周産期医学から出産・育児を考える 日本における母乳育児運動. 周産期医学, 32(増刊号), 745-750
- 2) 嶋岡暢希, 岸田佐智(2005). 育児をしている母親の母乳に関する評価. 母性衛生, 46, 163-169
- 3) 越山茂代(2002). 退院後の地域での母乳育児支援. 助産師雑誌, 56, 471-477
- 4) 玉上麻美(2001). 助産院における母親の育児の実態調査—聞き取り調査から—. 大阪市立大学看護短期大学部紀要, 3, 55-59
- 5) 岡沢幸代(1996). 母乳 3. 地域保健師の立場から. 茨城県母性衛生学会誌, 16, 57-60
- 6) Wilhelm, SL. Stepan, MB. Hertzog M, Rodehost TK, Gardner P. (2006). Motivational interviewing to promote sustained breastfeeding. J Obstet Gynecol Neonatal Nurs, 35, 340-348
- 7) Hoddinott P, Lee AJ, Pill R. (2006). One-to-one or group-based peer support

for breastfeeding? Women's perceptions of a breastfeeding peer coaching intervention. Birth, 33, 139-46

8) Tappin David (2006). The effect of health visitors on breastfeeding in Glasgow. International Breastfeeding Journal, 1, 1-9

2. 研究の目的

本研究では、地域における母親の母乳育児継続のための支援の検討するために、1) 母親が母乳育児を選択する意思に影響を与える要因 2) 母親の母乳育児の継続に影響を与える要因を明らかにすること を目的とする。

3. 研究の方法

郵送法による無記名自記式質問紙法を用いた縦断的研究を行った。倫理的配慮として対象者への依頼は研究協力依頼文書にて行い、調査への協力は自由であり、研究への参加の有無が今後提供される保健サービスには影響しないこと、結果は統計処理を行うため個人が特定されないことを保証した。また、居住地の匿名性を遵守すること、研究目的以外にデータを利用することはないことを記載した。

質問紙の内容：現在の児の栄養方法、SF36 活力、基本属性、首尾一貫感覚(SOC 短縮版 13項目)、母乳育児の困難感、母乳育児のソーシャルサポート、育児不安尺度、SF36 下位尺度活力等であった。

調査方法：

プレ調査：A市で実施された4か月児健診を訪れた4か月児の母親216名を調査対象とした。研究者から対象者に質問紙を配布し、郵送にて返送を依頼した。

本調査：第1回目調査：生後2か月以内の子どもを養育する母親500名。B市に協力依頼をおこない、保健センターで行う新生児訪問時に助産師または保健師より、対象者に、研究依頼書および質問紙・謝礼を配布した。

また、同時に第2回目調査の依頼を書面で実施した。

第2回目調査(生後4か月時)、第3回目調査(生後7-8か月時)：第1回目調査で同意を得られた233人に対して郵送法による無記名自記式質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

1) 母親が母乳育児を選択する意思に影響を与える要因について：プレ調査結果

対象者の平均年齢は 30.9±4.9 歳で、現在の児の栄養方法はミルク 18.2%、母乳 57.7%、混合栄養 24.1%、であった母乳育児の実施と母乳育児のきっかけとの関連を表 1 に示した。「母乳への関心あり」と母乳の実施には有意な関連がみられた ($p < .001$)。母乳育児に関心がある理由として「児に飲ませるのが楽であると思う」 ($p = .007$)、「母親教室の受講経験あり」 ($p = .045$) では母乳育児の実施と有意な関連が認められた。

表 1. 母乳育児の実施と母乳育児のきっかけとの関連

		n=137 人 (%)			p	
		計	母乳群	ミルク群		
母乳育児への関心	あり	129 (94.2)	110 (98.2)	19 (76.0)	< .001	
	なし	8 (5.8)	2 (1.8)	6 (24.0)		
母乳育児に関心がある理由 ^{*)}	児に飲ませるのが楽である	思う	77 (59.7)	71 (64.5)	6 (21.6)	.007
	思わない	52 (40.3)	39 (35.5)	13 (48.4)		
外出時の荷物が少ない	思う	90 (72.1)	82 (74.5)	11 (57.9)	.135	
	思わない	36 (27.9)	28 (25.5)	8 (42.1)		
経済的である	思う	88 (68.2)	77 (70.0)	11 (57.9)	.295	
	思わない	41 (31.8)	33 (30.3)	8 (42.1)		
母親にしかできないことと思う	思う	89 (69.0)	74 (67.3)	15 (78.9)	.423*	
	思わない	40 (31.0)	36 (32.7)	4 (21.1)		
スキミングが楽だと思う	思う	93 (72.1)	82 (74.5)	11 (57.9)	.135	
	思わない	36 (27.9)	28 (25.5)	8 (42.1)		
児に免疫力がつくとと思う	思う	102 (79.1)	88 (80.0)	14 (72.7)	.532	
	思わない	27 (20.9)	22 (20.0)	5 (26.3)		
ミルクより母乳の成分が優れていると思う	思う	53 (41.1)	46 (41.8)	7 (36.8)	.684	
	思わない	76 (58.9)	64 (58.2)	12 (63.2)		
母乳をあげるものだと感じていたから	思う	38 (29.5)	35 (31.8)	3 (15.8)	.184*	
	思わない	91 (70.5)	75 (68.2)	16 (84.2)		
母乳育児をしたいと思った時期 ^{**)}	妊娠前	52 (40.3)	46 (42.2)	6 (31.6)	.272	
	妊娠中	76 (58.9)	63 (57.8)	13 (68.4)		
	無回答	1 (0.8)				
母親教室受講経験	あり	108 (78.8)	92 (82.1)	16 (84.0)	.045	
	なし	29 (21.2)	20 (17.9)	9 (50.6)		

* 検定: Fisher's exact test

注 1) 母乳に関心ありと回答した人 (n=129)

母乳を与える意思に関して本研究の対象者の 94.2% は母乳に関心があると回答し、母乳に対する関心は高かった。母乳に関心がある理由としては、「児に飲ませるのが楽であると思う」が母乳育児の実施に関連していた。「児に免疫力がつくとと思う」「ミルクより母乳の成分が優れていると思う」などの児にとっての利点は多くの対象者に認識されていたが、母乳育児の実施と有意な関連は見られなかった。このことから、4 か月児の子どもを持つ母親の母乳育児の実施には、母親が認識する児にとっての利点だけではなく、母親側に母乳育児が日常的メリットとして感じられることが重要であると考えられる。

母親教室参加経験と母乳育児の実施に有意な関連が認められた。より多くの人々が出産前に母親教室を受講できるよう支援し、母親教室参加経験をもつ母親を増やすことが母乳育児を実施する母親の増加につながる

と考えられる。

2) 母乳育児に影響を及ぼす要因について

① 縦断的調査結果

第 1 回調査 (2 か月時) では 289 部の質問紙の返送を得て、287 部を分析対象とした。対象者の平均年齢は 31 歳であった。64.6% が第 1 子の母親であり、核家族 (88.9%)、集合住宅 (70.7%) に住む人が多かった。対象者の 93.6% には現病歴がなく、健康な人が多かった。対象者の児の月齢は 1 か月が 63.5% と最も多く、0 か月～1 か月児が対象の 91.2% を占めた。児の健康状態も 98.7% が良好であった。児の栄養方法についてはミルク 2.7%、混合栄養 31.6%、母乳 65.0% という結果であった。平成 17 年度の厚生労働省乳幼児栄養調査では 1 か月時の母乳栄養は 42.4% であり、対象者は母乳栄養の割合が高い。混合栄養の母乳の占める割合の平均は 61.1% と多く、主に母乳を与え、ミルクを足す、という状況の人が多くと考えられる。出産した施設を退院後自宅 (または里帰り先) にもどってから最もサポートを必要とした時期は 53.5% の人が「退院直後～1 週目までの間」と回答した。14.8% の人が「退院後 1 週目～1 か月までの間」と回答した。一方、「特にサポートの必要を感じなかった」と回答する人が 29.6% であった。産科施設の助産師から受けたサポートが 30.6% と最も多く、続いて、自分の親、夫、保健センターの助産師または保健師からサポートを受けた人が多かった。栄養状況がミルク群では出産から調査時 [2 か月以内] までに母乳に関するトラブルを経験した割合が多く有意な差がみられた。母乳・混合・ミルクのいずれの群でも出産施設では母乳育児の勧めをうけていたが、出産した産科施設での母乳育児を勧められた経験と現在の栄養状況に関して有意な差は見られなかった。母乳を与えることの満足感に関してはミルクで満足度が低い結果であった。

第 2 回調査 (4 か月時) では、193 部の質問紙の返送が得て 181 部を分析対象とした。における栄養状況はミルク 7.2%、混合栄養 24.3%、母乳 68.5% であった。第 1 回調査

時以降の母乳トラブルの経験については母乳、混合、ミルクの3群間に有意な差が見られ、ミルク群の母乳トラブルの経験が多かった。0～2か月の調査に比較すると、母乳、混合栄養でトラブルが「まったくなかった」と回答している割合が増加した。母乳育児の継続の希望については母乳、混合、ミルクの3群で有意な差がみられた。ミルク群の約半数が、母乳で育てたいと回答した。自分が満足する程度までお子さまに「母乳を与える」ことに取り組んでいますか（または過去に取り組んだ）においてミルク群は母乳群、混合群に比較し、満足している人の割合が低く、3群間には有意な差がみられた。

第3回調査（7-8か月時）では180名を分析の対象とした。ミルク17.2%、混合栄養17.8%、母乳64.4%であった。4か月以降に混合栄養に変更した理由をみると、母乳不足、仕事復帰のために混合栄養に変更する人が多い。4か月以降にミルクに変更した理由をみると母乳不足と回答した人が最も多かった。母乳育児の仲間についてのソーシャルサポートと栄養方法との関連について「育児について話ができる友達」、「育児サークルの友達」、「母乳を共にがんばっている仲間」、「母乳について相談できる友達」のいずれにおいても有意な差はみられなかった。母乳育児の経験については栄養方法と「母乳を子どもに与えられたことは育児をする自信になった」、「自分の気持ちに反して周囲の人からミルクを勧められた経験がある」に関しては有意な差がみられた。

4か月児の母親の調査においては、0～2か月の調査に比較し、混合栄養の母親が減り、母乳栄養の割合は2か月調査時に比べて3.5%高かった。混合から母乳へ移行できた人や、母乳育児を行っている母親が継続調査に参加した可能性が推測される。

母乳を与えることの満足感に関してはミルクで満足度が低い結果であり、母乳を希望しながらもミルクを与える人は自分が満足する程度まで「母乳を与える」ことに取り組めなかったという不全感を持っていることが推測される。ソーシャルサポートについては友達や育児サークルの友達などのサポートよりも、産科施設の助産師、保健センター

の看護職などの専門職種者や、自分の親、夫などの身近な人のサポートが重要なサポートとなることが示唆された。

②母親の栄養方法と母親の主観的健康感の検討

1989年に「母乳による育児を成功させるための10カ条」が発表され日本においても母乳育児を望む母親は増加している。妊娠中から「母乳で育てたい」と思う母親は96%に達しているが、生後4か月で母乳のみの栄養方法を取っているのは36.8%にとどまり¹⁾、母乳育児を希望しながらも実現できていない母親が多く母親が望む母乳育児を実現できる支援が求められている。

その一方で、母乳育児を確立するまでには母親が多くの困難と忍耐を要することがあり、支援する医療関係者側が、母乳へのこだわりは母親のストレスになる²⁾、育児不安につながるのではという恐れや先入観をもっているといわれている。そこで本研究では栄養方法別に母親の主観的健康感と育児不安について検討をすることを目的とする。

0-2か月時、4か月時、7-8か月時の3回の質問紙調査を実施した。尺度は、母親の主観的健康感について、健康関連QOL（HRQOL: Health Related Quality of Life）包括的尺度SF-36下位尺度「活力」を用いて測定し得点が低くなるほど過去1ヵ月間に母親が感じる活力が低い状態を表す。母親の育児のゆとりのなさは育児に対する不安を強める²⁾といわれおり、育児不安に関しては八幡ら（1998）の「育児のゆとり尺度」を用い得点化した。育児をする母親が感じる自身の心理的ゆとりがないほど点数が低くなる。分析はShapiro-Wilk検定によるデータの正規性を確認後、ANOVAまたはKruskal Wallis順位検定を行い、児の栄養状況別に母乳、混合、ミルクの3群についての検討を行った結果を表1～3に示した。

表 1.0～2 か月児の栄養方法と母の主観的健康感について

	児の栄養方法と母の育児不安得点		p
	n	育児不安得点中央値	
母乳	193	23.2±3.1	.062
混合	94	22.3±3.3	
ミルク	7	21.7±2.5	

児の栄養方法とSF36 活力				n=294
	n	SF36 活力平均点	SF36 活力得点中央値	p
母乳	191	60.7±16.9	63.2	
混合	93	57.9±16.6	60.2	.300
ミルク	8	56.3±25.0	60.5	

注1)ANOVA

表 2.4 か月児の栄養方法と母の主観的健康感について

児の栄養方法と母の育児不安得点				n=181
	n	育児のゆとり平均点	育児不安得点中央値	p
母乳	124	23.4±2.9	23.6	
混合	44	23.0±3.2	23.2	.697
ミルク	13	23.6±3.4	23.8	

児の栄養方法とSF36 活力				n=181
	n	SF36 活力平均点	SF36 活力得点中央値	p
母乳	124	63.1±17.8	62.5	
混合	44	61.9±16.8	65.6	.699
ミルク	13	63.1±17.3	68.8	

注1)Kruskal Wallis 順位検定

表 3.7 ~8 か月児の栄養方法と母の主観的健康感について

児の栄養方法と母の育児不安得点				n=180
	n	育児のゆとり平均点	育児不安得点中央値	p
母乳	116	22.9±3.3	23.0	
混合	32	24.3±2.8	25.0	.697
ミルク	30	23.2±3.4	24.0	
未記入	2			

児の栄養方法とSF36 活力				n=180
	n	SF36 活力平均点	SF36 活力得点中央値	p
母乳	116	64.1±16.4	68.8	
混合	32	64.1±15.6	65.6	.699
ミルク	31	61.5±19.4	62.5	
未記入	1			

注1)Kruskal Wallis 順位検定

0-2 か月時、4 か月時、7-8 か月時の全てにおいて、栄養方法と育児のゆとり得点、SF36 活力の得点では有意な差はみられなかった。

本研究では 0-2 か月時、4 か月時、7-8 か月時の 3 回の調査のすべての調査結果において母親の主観的健康感、育児不安ともに栄養方法別に有意な差はみられなかった。SF36 の活力は身体的健康度と精神的健康度に関わる尺度であり³⁾、母親の心身の健康状態を表す指標と考えられる。30 代の日本人女性平均得点は 58.7 点⁴⁾であり、0-2 か月時に混合栄養またはミルクを与えていた群は平均得点を下回っていたが、そのほかの群では日本人の平均得点以上で活力に満ちた状態で育児に取り組んでいたと考えられる。

育児不安に関しては、0-2 か月時のミルク群で育児のゆとり得点が最も低い結果であった。母乳がでない状況でミルクになった母

親はミルクになったことを自分の責任と感じ母親としての自信が揺らぐ⁵⁾といわれている。本調査では有意な差はみられなかったが、今後の課題として出産後早期にミルクにせざるを得なかった母親に育児不安のリスクについて検討していく必要があると考える。

- 1) 厚生労働省「平成 17 年度乳幼児栄養調査」
- 2) 山縣威日:母乳育児と産科医の役割を考える. 周産期医学 34(9):1415-1418,2004
- 3) 福原俊一,鈴鴨よしみ編著:関連QOL尺度SF-36v2TM日本語版マニュアル,健康医療評価研究機構,92-93,2004
- 4) 前掲3) 109
- 5) 嶋岡暢希・岸田佐智:育児をしている母親の母乳に関する評価.母性衛生 46(1):163-169,2005

③母親の母乳育児を志向する態度に関する測定尺度の開発

WHO は母子の健康に関する利点から 6 か月間の母乳育児の継続を推奨しており、我が国においても母乳育児の継続支援は重要な課題であると考えられる。計画的行動理論によると母乳育児の継続には母親の意思が重要であり、母親の意思は母乳育児継続を予測するために測定可能な概念と考えられる。本研究では、母親の母乳育児を志向する態度を測定するためのツールを開発し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とする。

尺度は Jank J(1992, 1994)、Humphreys AS (1998) による先行研究などを参考に 27 項目で構成した。分析では、はじめに探索的因子分析(重み付けのない最小二乗法・プロマックス回転)を行い、因子構造と項目の適切性を検討した(項目選定の基準は因子負荷量が 0.4 以上とした)。因子ごとに Cronbach's α を算出し内部一貫性を検討した後、各因子の得点を算出した。Thorndike(1982)による構成概念妥当性の検討方法に従い、児への栄養法が母乳・混合・ミルクの 3 群間で、各因子の得点分布に既知の概念と整合性のある差が認められるか否かを検討した。既知の概念には『育児支援者が母乳を望んでいる、母乳に関する肯定的な考え、母乳の利点の知識がある、母乳継続の自信があることは母乳育児の実施要因である』との先行研究結果を用

いた。3群間の比較検討に Kruskal-Wallis 検定を用いた（有意水準 5%）。

有効回答を得られた 297 名を分析対象者とした。因子分析の結果、最終的に 25 項目が採用され、第 1 因子は 9 項目、第 2 因子は 9 項目、第 3 因子は 7 項目の 3 因子で構成されていた。第 1 因子から順に「母乳育児に対する周囲からの期待の認識」、「母乳育児への肯定的な姿勢」、「母乳育児継続への楽観的展望」と名づけた。寄与因子率は 53.8%、各因子の Cronbach's α は 0.82-0.91 であった。各因子の得点は、いずれも母乳群・混合群・ミルク群の順で高く統計的にも有（ $p < 0.05$ ）であった。比較分析の結果は、母乳育児の実施要因に関する先行研究との整合性を認めた。

作成した尺度は、内部一貫性の高さから信頼性があると言える。また、比較分析では既知の概念との整合性がある結果が得られ、一定の構成概念妥当性があると考えられる。今後、新生児訪問等で母乳育児継続が困難な対象の把握への利用を可能とするために判別・予測的妥当性の確認等の検討を重ねる必要があると考える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 松村寛子、河村奈美子、山内まゆみ、加藤登紀子、4 か月児をもつ母親の母乳育児の実施に関連する要因の検討、日本地域看護学会、11、68-73、2009、査読有り

〔学会発表〕（計 2 件）

① 松村寛子、河村奈美子、山内まゆみ（2008.7）. 4 か月児を持つ母親の母乳育児継続に関連する要因の検討、第 11 回日本地域看護学会学術集会（於沖縄県西原町）

② 松村寛子、新納美美、加藤登紀子（2008.12）. 母親の母乳育児を志向する態度に関する測定尺度の開発、第 28 回日本看護科学学会学術集会（於福岡）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松村 寛子 (MATSUMURA HIROKO)
市立大学・看護学部・助教
研究者番号：60433140

(2) 研究分担者

該当者なし

(3) 連携研究者